

第二十六回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

野本 和幸 著 『フレーゲ哲学の全貌 論理主義と意味論の原型』

(2012. 9. 20 勁草書房)

野本 和幸 東京都立大学名誉教授・創価大学名誉教授

のもと かずゆき 1939年(昭和14年)8月28日生まれ。 74歳 東京都出身。

論理・言語・数学の哲学の歴史的・体系的研究(カントからフレーゲ前後まで)。

国際基督教大学教養学部卒業。京都大学大学院文学研究科・西洋近世哲学史修士課程修了。京都大学大学院文学研究科・同 博士課程単位取得退学。1988年、文学博士(京都大学)。1967年、茨城大学文理学部・教養部専任講師、同助教授、同教授、ACLS(全米学術協会)招聘研究員(UCLA哲学部研究員)A. v. フンボルト財団招聘研究員(ゲッティンゲン大学哲学部研究員)、北海道大学文学部哲学科西洋哲学(現代哲学)助教授、同教授東京都立大学人文学部哲学科教授。フンボルト財団ヨーロッパ研究員(コンスタンツ大学、オックスフォード大学各哲学部研究員)、創価大学文学部教授。東京都八王子市在住。

単著に、『フレーゲの言語哲学』(勁草書房)、『現代の論理的意味論—フレーゲからクリプキまで』(岩波書店)、『意味と世界』(法政大学出版局)、『フレーゲ入門—生涯と哲学の形成』(勁草書房)。編著に『言語哲学を学ぶひとのために』(世界思想社)、『分析哲学の誕生—フレーゲ・ラッセル』(勁草書房)、『大出晁哲学論文集』(慶應義塾大学出版会)他、共著に、Logik und Mathematik, hrsg. Von W. Stelzner, de Gruyter)他多数。主要訳書に、S・ケルナー『カント』(単独訳、みすず書房)、A・ケニー『ウィトゲンシュタイン』(単独訳、法政大学出版局)、D・デイヴィッドソン『真理と解釈』(編・訳+解説、勁草書房)アンスコム・ギーチ『哲学の三人—アリストテレス・トマス・フレーゲ』(共訳+解説、勁草書房)、H・パトナム『理性・真理・歴史』(共訳+解説、法政大学出版局)『フレーゲ著作集』全6巻(編・訳+解説、勁草書房 2002年度日本翻訳出版文化賞受賞)他。

受賞のことば

今回和辻哲郎文化賞を授与頂き、驚きとともに、真に名誉なことと感謝申し上げます。

私も高校・大学時代から、一読者として、『古寺巡礼』『風土』『ホメーロス批判』『カント倫理学』『人間の学としての倫理学』等に親しみ、卒業研究はカントの実践哲学、修士論文はカントの認識論でした。博士の『ニーチェ研究』以来、日本ではニーチェは著名ですが、同時代の論理学者・数学者・哲学者G・フレーゲはほとんど知られていません。フレーゲは、カント同様、数学の基礎・その妥当性を問い、現代論理学の創始と、論理的言語の意味論の徹底的究明を通じて、その課題に応えようとしています。しかし彼の数学の哲学はパラドクスに直面します。その後欧米では1960年、7

0年代から言語哲学としてフレーゲの復活が始まり、1970年代後半には数学の哲学の再評価も開始され、現代哲学の深部に深い影響を及ぼし続けています。本書で私は、フレーゲ哲学の全体を「論理主義と意味論の原型」として解明しようと試みました。こうした基礎的な研究に対し、日本の代表的哲学者、和辻哲郎博士の名を冠する賞を頂いたことは、望外の励ましです。心から御礼申し上げます。

《選考委員評》

鷺田清一

輻輳するさまざまな意味において、野本和幸氏の生涯をかけた仕事には「ラディカリズム」という形容がなにより相応しいとおもう。「徹底的」「根底的」という意味においてである。

人文学、とりわけ哲学や文学は特異な学問で、「あなたの専攻は？」と問われて固有名詞で答えることができる。「アウグスティヌスの専攻です」「モーパッサンを専門にしています」といったぐあいに。医学や工学、物理学はもちろん、経済学や法学、社会学でもありえないことだ。その研究は、対象となる人の書き物を、書簡や日記やちょっとした書き置きまで含めてすべて深く読み込んでゆくもので、もちろん関係者による証言も徹底的に探索する。野本氏もそれを徹底しておこなっている。

が、ヘーゲルもいうように哲学もまた「時代の息子」なのであって、フレーゲの仕事は孤立したものではない。数学や論理学の歴史と、同時代の研究者らとの切磋琢磨のなかにあって、それは独自の位置価値をもつ。フレーゲの《論理学革命》は、アリストテレス以来二千年の論理学の歴史を大きく書き換えるような出来事であったし、それを《原型》ないしは震源として現代のさまざまな論理学の展開はある。

フレーゲの《革命》は論理学史のどこに照準を合わせたものであったか、デデキントをはじめとする同時代の数学者たちの共鳴もしくは黙殺の反応はどんなものであったか、野本氏はそれを詳細に分析する一方、ラッセルの鞏固な反論、フッサール現象学との交叉、ヴィトゲンシュタインの離反を論じ、さらに、記号論理学、論理実証主義、可能世界意味論、指示論など、二十世紀のいわゆる哲学の《言語論的転回》の諸相につねに発火点としてフレーゲの思考があったことを検証する。しかもそのつどそれを、カプラン、ダメット、パーティツヒ、デイヴィドソンら現代の論理学・言語哲学の革新者たちとの膝つき合わせた対論に上せてもいる。そう、野本氏は海を跨ぐ研究交流の最前線にいつも立ってきた。それどころか、自身が中心になって全六巻の『フレーゲ著作集』の編集・翻訳刊行にも世界に先んじて取り組んだ。

まちがいなくフレーゲ研究の金字塔である本書は、眼疾による失明の怖れのなかで完成された。最後の最後まで手を緩めることなく、「近年流行の自分探しや思考の労を省いて手軽に早分りを求める

風潮、あるいは華麗なレトリックを駆使して異分野間を自由に天翔る祝祭的思考、あるいは共同研究と称する多額の資金を注ぎ込んだ集会的思考の趨勢に抗する」ことを矜持としつつ、完成にこぎ着けた。その意味でも本書はラディカルである。

関根 清三

野本和幸氏の『フレーゲ哲学の全貌』は、著者半生のフレーゲ研究の集大成であり、我が国、あるいは世界のフレーゲ研究の、一大金字塔と言えよう。

ニーチェと同時代のドイツの哲学者、ゴットロープ・フレーゲは生前認められること少なく、死後いったん忘れられかけた。しかし論理によって算術を基礎づける「論理主義」の提唱や、アリストテレスの論理学を覆した述語論理学の構築など独創的な業績が、現代哲学に新たな刺激を与えるものとして、近年再評価の動きが活発である。ただその著作集は、祖国ドイツでも英語フランス語圏でも、未だ出版されていない。それをいち早く完成したのは我が国であり、中心的推進者が野本氏だった。

本書は、その六巻からなる著作集のうち四つの巻に記した詳細な編者解説に加筆し、並行して内外の学会誌に発表して来られた数多の論考、そして本書のために書き下された諸考察を加えた、七〇〇頁近い大著である。しかもそれらは体系的に配列構成されて、フレーゲの生涯を概観した序章に始まり、彼の数学、論理学、哲学、言語論それぞれの領域の詳細な検討に進み、更には領域相互の関連への目配りと、同時代から現代に至る研究の中での周到な位置づけと展望をもって結ばれるのである。なかでも従来等閑に付されがちだった数学者としてのフレーゲの出発点が、後の論理学者、言語哲学者としての仕事の基礎にあることを、精彩に富む筆致で剔抉した点に、選者は眼を洗われる思いがした。その際、デデキント、ラッセル、ヴィットゲンシュタイン等、同時代の学者との比較も周到になされ、数とは何かといった哲学的な問題への問い進みがフレーゲにおいてひとときわ深く多くの可能性を胚胎しており、現代の世界的なフレーゲ・ルネサンスの動向が故なきものでないことを、見事に明らかにしてくれる。

その根底には、海外のシンポジウムや学術講演に招待され、長年にわたる国際的な共同研究を遂行して来られた中で入手された、断簡零墨にいたる書簡・資料の精細な読みもまた豊かに息づいている。

フレーゲの、特に数式に関しては目に一丁字もない私が、選考評を書くことじたい恐れ多いが、かつて若き日、共に北大の新米教員として公務で切磋し、私事ではスキーの初心者同士、雪まみれになって転びまろびつ遊んだ仲間としての気安さがなさしめることと、御寛恕いただきたい。いずれにせよ明らかなことは、専門私情を離れて候補作を閲覧通読した結果、野本氏の御大著こそ、今年度の我が国の思想哲学の好著秀作の中でもひとときわ抜きん出た達成だという一事である。

野本和幸『フレーゲ哲学の全貌 論理主義の意味論の原型』は、ゴットロープ・フレーゲという十九世紀半ばに生まれ二十世紀初め第一次世界大戦終戦後に亡くなった哲学者のまさに全体像を明らかにした大著である。そのフレーゲがとらえた「哲学」は、近代日本では、戦前における田辺元、下村寅太郎などの「科学」「論理」に繋がる。また戦後少し経ち 1950 年代半ば頃に始まり二十世紀末に向けて種々の哲学者によって「言語哲学」「分析哲学」として大きく展開する。野本氏は、その二十世紀哲学の展開をご自身まさに端的に担った方といえよう。ただし、その展開には歴史があり変化がある。野本氏は、その歴史・変容を追うのではなく、むしろ展開の根となったフレーゲ自身の在り方・流れを踏み込んでとらえる。そのフレーゲへと遡及するお仕事が、大事なフレーゲ著作集の刊行となりまたフレーゲ論としての本書の完成となったのである。

十九世紀後半に生まれた哲学者として、日本では、フッサール、ベルグソン、さらにハイデガー等が知られ、それらのあり方はよく研究され一般にもかなり知られている。しかし、その時代の哲学の流れには、日本の一般の人々にはあまり知られていないが、フレーゲに始まるとされる論理主義が分析哲学として大きな運動となったのである。そのことの元来の意味を、私たちにはっきりと知らしめた点で、本書の意義は途轍もなく大きい。研究上においても、野本氏は、フレーゲの哲学をどこまでも妥当な形で把握され、また優れた国際的な活動をされ、そのお仕事は国内はもとより海外においても高く評価されている。本書はまさに学術としての賞に相応しいご本である。

フレーゲは、「高階論理の統語論」を説いた。やがてゲーデルの論理学が不完全性定理・連続体仮説などを説いた。そこにある「統合」「意味」「不完全性」等はどうなるのか。その構造や意味を私達自身のはたらきと結びつけるとどうなるのか。すると、それは「論理」だけでなくまさに生きた人が懐く認知として「哲学」となる。また、西田幾多郎が統合と無において根本的にとらえた「生命」にも結び付くのではないか。また、現代の科学ないし科学哲学がとらえる物の自己組織化・形態化に繋がるのではないか。——本書「以後」の哲学について、私はこのように思った。

本書「以前」はどうか。そもそも「哲学」とは元来何だったのだろうか。アリストテレスにおいてそれは人の心がいづく「論理」だった。と同時に、人は「エネルゲイア」を持ってそれを懐いていた。この二つが結び付くからこそ、生きている人は習慣・学習において、哲学としての認知をもつ。このような哲学や倫理学の「根」とは、フレーゲの論理はまだ結び付いていないようである。が、いずれ結び付いてほしい——そう二十一世紀の科学の中で哲学を生きる私は考え期待した。

あえていうなら、本書は、人々に対して更にいくつかの仕事の要請を述べているようだ。人間の理性がもつ可能性と限界を論理組成的に示すある基底の書かとわたしには思えた。